

# 自然誌 だぶり 夏

Natural history

三重自然誌の会情報誌 89号

2011年 8月

## 宝石のなる木

その名も貴き「ニシキキンカメムシ」。「錦金」の名が示すとおり、宝石のように美しい。幼い頃から根性がなく、楽をして美しい虫や珍しい虫を見たい、捕りたいと願うひ弱な昆虫少年であった私にはずっと遠い憧れの虫であった。

その虫が北勢地方の山中で見られると聞いたのは昨年7月。すでに時期を逸していたので、11カ月待ち、本年6月13日に期待に胸をふくらませながら、ご本尊が見られるというツゲの木を訪ねた。この場所を発見した本会会員のSさんがわざわざご案内くださった。

夢にまで見たご対面は実にあっけなかつた。Sさんが「ほら、そこに。あっ、そこにも！」と指さす先に、熱心に(?)交尾にはげむ2組のニシキキンカメムシがいた。惚れ惚れするほどきれい!

Sさんによれば、年によっては幼虫の発生数が多すぎて、ツゲの木が吸汁によって衰弱することさえあるという。成虫には及ばないものの、幼虫も光沢があり十分にきれいなので、きっと「宝石になっている」かのようだろう。夏にまた訪れ、見てみたいと思っている。



写真 ツゲの木で交尾するニシキキンカメムシ。カラーでお見せできないのが残念。

〈佐野 明：津市河辺町〉

## 海岸のハマベバエとツマグロイソハナバエ

篠木善重

25年以上前に発刊された『みえ昆虫記』は私の愛読書の一つである。4人の執筆者たちの卓越した観察力と文章力には何度読み返しても感服する。250種の昆虫の暮らしぶりが紹介されているその中に、ハマベバエが「波打ち際のごみにとまる成虫」写真付きで取り上げられている。この同じ写真が四日市市史でも使用され、同じくハマベバエとして紹介されている。同市史ではハマベバエの隣にノツマグロバエとする写真も載せている。

この2種のハエについて、かねてよりいろいろ疑問に思っていたところ、このほど謎が解けてきた。まず、ノツマグロバエは誤植で正しくはノツマグロイソバエ、なお平嶋ら(2008)はツマグロイソハナバエと改名している。

次に、ハマベバエと紹介している記事は両文献ともに正しくハマベバエについて述べられているのであるが、使われている写真がなんとハマベバエのものではないことが判ってきた。

著者の石田氏に確認したところ、「エチレン廃液に誘引されて集まってきたハマベバエの実物は現場で確認しているが、駆除の依頼を受けて出かけたものだから、そのときにカメラを持っていかなかった。写真は知人から提供されたものである。」とのことであった。

私見ではあるが、ハマベバエに間違われた写真はツマグロイソハナバエ♀ではないかと思う。四日市市史に載っているツマグロイソハナバエの写真は、翅端に黒褐色の大きな円紋があるからツマグロイソハナバエ♂である。

伊藤ら(1977)は雌雄の区別をせずに、ノツマグロイソバエは「翅端には黒褐色の大きな円紋がある」と記載している。この記載を鵜呑みにすると、翅端に黒褐色の円紋がなければ別種と判断してしまう。ノツマグロイソバエの雌雄とハマベバエの生態写真が同時に示されている図鑑類は、私が調べた範囲では加納ら(2003)だけである。加納ら(2003)は、ノツマグロイソバエの「雄の翅端に黒色円形の斑紋がある。」と記載している。今から25年以上前には、この2種に関する情報は極めて乏しかったことが思いやられる。2種ともに海岸に生息するので、「波打ち際のごみにとまる成虫」を見て、ノツマグロイソバエとは別もので、これぞハマベバエなるものに違いなかりと誤解してしまったのだろう。

さて、筆者がこれまで県内で確認しているハマベバエ *Coelopa frigida* (ハマベバエ科) とツマグロイソハナバエ *Fucellia apicalis* (ハナバエ科、旧称ノツマグロイソバエ) について以下に報告する。

### 採集標本

ハマベバエ *Coelopa frigida* (Fabricius) : 津市河芸町東千里 ; 1頭(菜の花に訪花), 19.III. 2010, 河芸町田中川干潟 ; 1頭, 23. III, 2010, 河芸町一色豊津海岸 ; 3頭 (マサキ葉上), 10.IV, 2011, 松阪市松名瀬町松名瀬干潟 ; 1頭 (シャリンバイ葉上), 15.V, 2011, 北牟婁郡紀北町大島 ; 1頭, 14. I, 2011 (文化庁許可番号21受庁財第4号の699).

ツマグロイソハナバエ *Fucellia apicalis* Kertész : 津市河芸町中別保豊津海岸 ; 3♂, 26.IV. 2009, 1♂, 11.V. 2009.

これら11頭の標本は全て筆者採集。三重県立博物館に寄贈する予定である。

## 目撃記録と知見

採集はしていないが写真撮影している2種についても記録する。2009.2.26津市河芸町中別保の自宅庭でハマベバエ（写真1）、おそらく拾い集めてあった海藻類を庭に捨てておいたために発生したものと思われる。2010.3.23津市河芸町東千里の墓地において墓石を飛び移るハマベバエ（写真2）、おそらく墓に供えた生花の腐敗臭に誘引されたものだろう。ツマグロイソハナバエは河芸町中別保の豊津海岸波打際で、2009.4.24に打ち上がった海藻に止まる♀（写真3）、2009.4.27には漂着したスナヒトデに止まる♂（写真4）を確認した。

ハマベバエは海岸に生息し、多数が海藻に群がる（加納ら、2003）といわれているが、筆者は海藻に群がる生態を未だ見ていない。海岸から数百メートル離れた墓地や菜の花畑での本種の単独行動を2回目撃している。本種の集団行動としては、波打際から数十メートル離れた所に自生するマサキやシャリンバイの葉上または葉陰に集まっているのを2ヶ所で確認している。

ツマグロイソハナバエの成虫は海岸に打ち上げられた海藻や海産動物の死体などに集まり（加納ら、2003）、各地に普通（平嶋ら、2008）である。筆者は、2009年に本種を確認した海岸を2011年7月29日に調査したが、多数の貝類が打ちあがってはいたものの本種を見つけることは出来なかった。

## 謝 辞

双翅目談話会の大石久志氏にはハマベバエを同定していただいた。九州大学名誉教授の三枝豊平博士にはインターネットの画像掲示板「一寸のハエにも五分の大和魂・改」においてツマグロイソハナバエ雌雄の写真による同定をしていただいた。石田昇三氏には古い記憶を昨日のこのようにお話いただいた。各氏に厚くお礼申し上げる。

## 文 献

- 伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦勇. 1977. 全改訂新版原色日本昆虫図鑑（下）. 385pp, 保育社.
- 石田昇三. 1985. ハマベバエ. 三重昆虫談話会（編）みえ昆虫記：206, 中日新聞本社.
- 石田昇三. 1990. 第4章動物 24双翅類. 四日市市史第1巻自然編：420-421.
- 加納六郎・篠永哲. 2003. 新版日本の有害節足動物 - 生態と環境変化に伴う変遷. 397pp, 東海大学出版会.
- 平嶋義宏・森本桂（監修）. 2008. 新訂原色昆虫大図鑑Ⅲ. 654pp, 北隆館.



写真1 ハマベバエ. 庭のツツジ葉上にて, 2009.2.26津市河芸町中別保.



写真2 ハマベバエ, 墓地にて, 2010.3.23津市河芸町東千里.



写真3 ツマグロイソハナバエ♀. 打ち上がった海藻上にて, 豊津海岸2009.4.24.



写真4 ツマグロイソハナバエ♂. スナヒトデ上にて, 豊津海岸2009.4.27.

〈しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1〉

# 和歌山市の二里ヶ浜に漂着したスクミリンゴガイ

柏木 健 司

2010年3月3日の夕暮前、和歌山県紀伊由良地域の鍾乳洞調査への移動途中で、和歌山市北西の二里ヶ浜に立ち寄りました。浜の東側の波打ち際で貝殻を探していると、スクミリンゴガイ (*Pomacea canaliculata*) が砂に半ば埋まって散在していることに、阿部勇治氏 (滋賀県多賀町立博物館) が気づきました。スクミリンゴガイは、中南米原産地のリンゴガイ科 (Ampullariidae) の淡水棲大型腹足類で、1980年代に日本に持ち込まれ、現在では茨城県以西の太平洋・瀬戸内海岸沿いに分布を広げている外来種です<sup>1)</sup>。

二里ヶ浜での全ての採取個体は、欠損の無い殻に蓋と軟体部を伴い、採取時には蓋は完全に閉じ、腐敗臭は全くありませんでした。今となっては後悔ですが、あまり関心が強くなかったために産状の写真も撮らず、さらに採取時に生きていたか否かも確認しませんでした。なお、時期と産状に基づくと、採取個体は越冬個体と思われます。また、和歌山市の水田には本種が生息していることから、内陸の水田から河川等を通じて海域に流され漂着したものと想像されます。

軟体部を取り除き貝殻標本にした14試料について、ノギスで計測した値を表1に示します。十分な数ではありませんが、その大きさは殻高で22~64mmの範囲にあり、成貝に該当します (表1, 図1)。なお、スクミリンゴガイの海浜への漂着は、調べた限りでは和歌山県白浜町番所崎<sup>2)</sup>と神奈川県三浦半島<sup>3)</sup>で報告があり、両事例ともに死殻の漂着とされています。

私自身は、二里ヶ浜で実物を見るまで、スクミリンゴガイの存在自体を知りませんでした。二里ヶ浜は、海水浴とサーフィンで有名な海水浴場ですが、私にとっては中・高校時代に砂質底質棲の海産貝類の貝殻を収集した思いで深い海辺です。その頃、二里ヶ浜にスクミリンゴガイが漂着していた記憶はありません。また、2009年末に三重県の紀伊長島から和歌山県の串本までの海浜を点々と歩きましたが、スクミリンゴガイには気づきませんでした。海浜への本種の漂着の意義は分かりませんが、事例として報告しておきます。

文献：1) 増田・内山, 2004, 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240pp, 株式会社ピーシーズ。2) 久保田, 1999, 南紀生物, 41, 114。3) 倉持卓司・新倉弥幸, 2004, みたまき (相模貝類研究談話会誌), no.41, 4-5。

表1 二里ヶ浜漂着のスクミリンゴガイ計測値。

試料番号	殻径 (mm)	殻高 (mm)	殻高/殻径
100303-01	18.15	22.00	1.21
100303-02	25.85	30.15	1.17
100303-03	25.00	30.50	1.22
100303-04	29.30	33.45	1.14
100303-05	31.25	38.80	1.24
100303-06	41.65	48.10	1.15
100303-07	33.00	37.05	1.12
100303-08	44.55	49.55	1.11
100303-09	50.50	58.50	1.16
100303-10	49.60	52.20	1.05
100303-11	48.85	51.40	1.05
100303-12	56.45	63.65	1.13
100303-13	54.65	62.25	1.14
100303-14	50.85	57.25	1.13

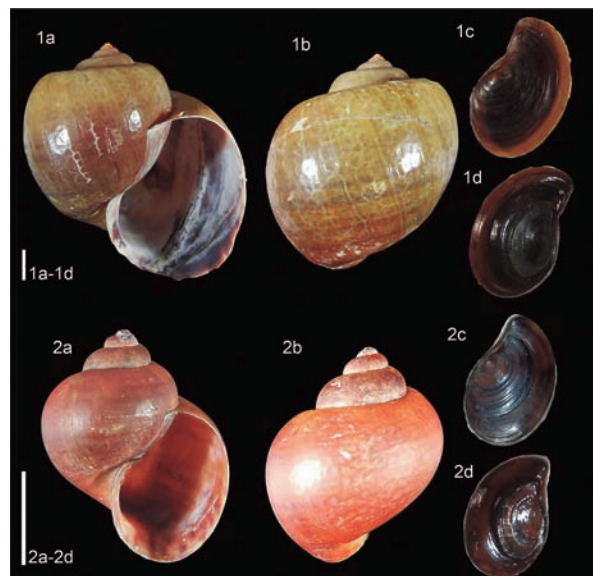


図1 二里ヶ浜漂着のスクミリンゴガイ。1a-1d: 100303-12, 2a-2d: 100303-01。スケールバーは1 cmを示す。

〈かしわぎ けんじ: 富山大学〉

## 三重県庁前のタヌキ

上 田 利 彦

異例ともいえる早めの梅雨明けを迎え、7月に入ったある日、夕方5時過ぎにエアコンが切られた職場で暑さに我慢しきれずに8時頃帰途につき、県庁前の花時計の横の通路を歩いていたらなにやら黒い生き物が足下を横切りました。大きさはティッシュケースの箱ぐらい、そこそこすばやい、子猫にしては太い、子犬にしては小さすぎるし素早かった、と考えて思わず「タヌキかぁ？」と声を上げたら、後ろからきていた人が「あそこにもいますよ！」とほかにもいることを教えてくれました。そっちの方を見やると、確かに同じ生き物がちょこちょこ走りまわっている。よくよく見ればあちこちにいて、結構素早く走るので確実ではないが5～6個体いるようでした。

残念ながら、その日は手元に明かりもなく、確認できずにそのまま帰途につくこととしました。

翌日、早々に仕事を切り上げ、出向いたところ、やはり仔タヌキが4頭築山の芝生や生け垣の根元で食べ物を探すように歩き回っていました(写真1)。

舌をそっと打ち鳴らしながらしゃがんだところ、3頭はどこやらへさっと逃げてしまいましたが、一頭だけはちょこちょこ寄ってきました。その距離2mほどのところで立ち止まり、「えさでもくれんかい？」と言いたげにこっちをしばらく見ていましたが、やがて何もしてくれない(されんかい?)と思ったのか、そしらぬ顔で脇にあったケヤキの根元をごそごそ掻き始めました(写真2)。

携帯電話で撮影しようとさらにそっと近づきましたが、さほど気にかかる様子もなく1m足らずの距離で3枚ほど画像に納めることができました。触れそうだなと思いそっと手を出したら、さすがに危険を感じたのか、ささっと逃げ、2mほどの距離をとり立ち止まってこっちを振り返ります。2mほどが安心できる距離なのかと、しばらく追いまわして見ました。しばらくして突然どこかから「チー(?)」と声が出て、その声が聞こえた途端、仔タヌキはその方向に逃げていきました。そこは、ブロック積みの構造物の裏側に空いた隙間で先に逃げたと思われる個体が顔を出してこっちを見ていました。どうもそこが巣になっているようです(写真3)。さっきの声はその兄弟が発したもののようでした。

それから仕事帰りに仔タヌキを見ることを楽しみにしていますが、その後4個体しか確認できないことと、親タヌキがいないことが気になっています。7月16日に写真撮るために出向き、あちこちを見て回りましたが、タヌキ特有の溜め糞もありませんでした。

仔タヌキだけで生きているのか、親は警戒心が強く出てこないのかわかりませんが、仕事の疲れを一気に吹き飛ばしてくれるあの仔タヌキたちがたくましく生きていてくれることを願うばかりです。



写真1 タヌキが子育てをする県庁前の築山



写真2 餌をさがす仔タヌキ



写真3 巣穴に帰る仔タヌキ

〈うえだ としひこ：津市久居一色町〉

## 三重県のみどりしゃみせんがい

中野 環

みどりしゃみせんがい *Lingula unguis* (Linnaeus) は、触手動物門腕足綱のしゃみせんがい科に属する生物で、ハウキムシやコケムシのなかまです。二枚の殻があるため、二枚貝のなかまとまちがえてしまいます。殻の大きさは40mm程度で、縦に長い長方形の形をした光沢のある緑色をして、同心円状の成長線が見られます。殻の後端からは肉茎が下方に伸び、砂泥底にもぐって生活をしています。現在、生息するしゃみせんがいのなかまは、今から4億年以上も前のオルドビス紀の地層から産出された化石種と形態がほとんど変化していないようです。

現在、みどりしゃみせんがいは青森県以南から中国、フィリピンを経て、インド洋やオーストラリア東岸まで分布します。日本での生息地は、有明海、瀬戸内海、土佐湾、笠利湾、青森県浅虫、岩手県大槌、静岡県下田などに限られているようです。

三重県にも、以前からみどりしゃみせんがいは生息しているようですが、あまり報告がないようです。私の手元には1981年10月、伊勢市有瀧の底引漁のゴミの中から得た、割れた殻片が1個と、小俣町の櫻井政次郎氏に1955年11月5日に白子で採集した個体をいただいたものがあります(写真1)。

2011年7月20日から21日にかけて三重県付近を通過した台風6号の影響で、津市阿漕浦には大量のゴミが打ち上げられました。7月22日の夕刻、打ち上げられた8個体のみどりしゃみせんがいを得ることができました。既に、肉茎はありませんでしたが、殻の内部には軟体が残っていました(写真2、3)。最大個体は、殻長36.3mm、殻幅16.0mm最小個体は殻長23.5mm、殻幅10.6mm、平均は殻長32.4mm、殻幅14.2mmでした。三重県にも数十年ぶりにみどりしゃみせんがいが復活してきたのでしょうか？



写真1 鈴鹿市白子産。(1955/11/5 櫻井政次郎氏採集)



写真2 津市阿漕浦産。(2011/7/22)



写真3 軟体部が残った個体。

〈なかの たまき：度会町大野木1711-1〉

### シンポジウム

### 紀伊半島の野生生物Xのご案内



第8回和歌山大会のようす

奈良、和歌山、三重3県の市民団体が持ち回りで開催するシンポも、今年で10年目を迎えました。紀伊半島の野生生物をコンセプトに、毎回テーマを決めて開催しています。今年は、「島にせまる」をテーマに、三重県尾鷲市で開催しますので、多くの方の参加をお待ちしています。詳細は、同封のチラシをご覧ください。

## 事務局から

### ○新県立博物館の収蔵機能についての質問と回答

新県立博物館が、津市に建設されております。古いモノを表現するときに「博物館行き」という言葉があるくらいですから、博物館と収蔵機能は切っても切れない関係にあるのでしょうか。私事ですが、以前に県庁の環境部局に勤務していたときに、「生物多様性センター」の予算要求をしたことがあります。ちょうどCOP10の名古屋開催に向かっていましたので、意外と理解は得られたのですが、収蔵に関する予算だけは、「この機能は博物館」ということで取り下げざるを得ませんでした。

しかしながら、当時の県立博物館は大変古く、手狭でしたので、安心して標本を寄贈できる状態ではありませんでした。その間に、貴重な標本の県外流出も多発し一部は新聞記事にもなったことから、県内資料の受入先として新県立博物館建設の機運も高まってきたように思います。博物館機能のなかでも、調査研究や展示機能は他の機関でも代替可能ですが、収蔵機能だけは博物館唯一のものとして、多くの方が新県立博物館に期待をしていることでしょう。

そこで、新県立博物館の収蔵機能に関して、準備をすすめている県立博物館に当会から質問しましたので、以下に質問内容とその回答を掲載します。なお、質問は本年6月20日、回答は6月29日付けです。

#### 【新博物館整備について（質問）】

平素は本会活動につきまして、ご支援をいただきありがとうございます。

さて、三重県の新博物館整備が着々と進められていることは、長年にわたり博物館整備を要望してきた当会にとりましては、大変喜ばしいことでもあります。博物館準備室の職員の皆様におかれましては、新博物館がさまざまな機能を発揮すべく準備を進めていることと思っておりますが、その中で「収蔵」は博物館のみが有することのできる機能として、私どもは特に期待をしております。

つきましては、新博物館の収蔵機能に関しまして、下の事柄についてご回答いただきますようお願いいたします。

- 1 新博物館における各収蔵庫の面積（ご計画の分野別に）
- 2 自然関係の収蔵庫について、新博物館開館時における現有資料の占有率  
※開館時にどれだけ埋まっているかということです。
- 3 新博物館における自然資料収集計画

#### 【新博物館整備にかかるご質問について（回答）】

平素は、当館並びに新県立博物館整備にご理解ご支援を頂き、厚くお礼申し上げます。

さて、平成23年6月21日付けでご質問いただきました、このことについて、下のと通りの状況です。今後、新県立博物館の開館に向けて整備を進めて参りますので、一層のご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

- 1、新県立博物館における各収蔵庫の面積
  - ・各収蔵庫の平面積は、別紙1（表1）のとおりです。
  - ・主な収蔵庫については、2層化や移動棚を導入して、収蔵効率を上げる計画です。
- 2、自然関係の収蔵庫の新県立博物館開館時における現有資料の占有率
  - ・占有率は、別紙2（表2）のように想定しています。
  - ・ただし、現段階では、各分野の資料の現状収納面積と収納密度をもとに、新県立博物館での現有資料の収納必要面積を算出し、占有率を想定しています。実際には、資料移転の際に収納状態の見直しを行いますので、占有率は変化するものと思われま。
- 3、新県立博物館における自然資料収集計画
  - ・収蔵資料の収集については、本度から新県立博物館の収集方針について検討を行い、「資料収集方針」としてまとめることとしています。
  - ・また、並行して、新県立博物館建設地や御幣側流域での地層化石調査、新県立博物館の基本展示などの準備にかかる調査・資料収集、寄贈資料の受入などによる資料の収集をすすめています。

表1 収蔵エリア縮室面積

エリア	室名		平面積	備考
収蔵エリア	収蔵庫	民俗・考古資料収蔵庫	238㎡	一部2層構造, 一部移動棚 2層構造 2層構造, 上層移動棚 2層構造, 下層移動棚 2層構造, 上層移動棚 2層構造 ・木箱積み上げ 移動棚 一部2層構造
		美術工芸資料収蔵庫	214㎡	
		歴史資料収蔵庫(歴史的公文書資料含む)	411㎡	
		地学資料収蔵庫	318㎡	
		生物標本資料収蔵庫	513㎡	
		液浸標本資料収蔵庫	67㎡	
		大型・民俗資料収蔵庫	176㎡	
		写真・映像資料収蔵庫(前室1含む)	50㎡	
		特別収蔵庫	69㎡	
		借用資料収蔵庫	40㎡	
		人文系収蔵庫グループ前室	81㎡	
		自然系収蔵庫グループ前室	60㎡	
	冷凍・冷蔵庫室	15㎡		
	収蔵関連縮室	生物被害処置室(前室2室含む)	45㎡	
		仮収蔵室	64㎡	
		資料受入準備室1・2(WC含む)	55㎡	
荷解室(トラックヤード含む)		202㎡		
小計			2618㎡	
共有部	EV, 階段	廊下	125㎡	
	廊下			
小計			125㎡	
合計			2743㎡	

表2 自然系収蔵庫想定占有率(開館時)

エリア	室名		想定占有率	備考
展示エリア	収蔵庫	地学資料収蔵庫	約69%	地学収蔵庫との間で資料の収納調整
		生物標本資料収蔵庫	約77%	
		液浸標本資料収蔵庫	約54%	
		大型・民俗資料収蔵庫	100%	
		冷凍・冷蔵庫室	約27%	

さて、会員の皆様の中には、長年の研究成果であるご自身の標本等を新博物館に寄贈することを考えている方もおみえかと思えます。残念ながら、生物収蔵庫の残りは23%ということですので、今年度から検討するという「資料収集方針」の動向もみながら、どこに寄贈するかをご判断ください。参考までに、自然史系博物館として評価の高い大阪市立自然史博物館の収蔵庫は、一般(化石・骨)748.34, 特別(植物・昆虫)688.22, 液浸323.48, また、三重県が新博物館のモデルにしたという滋賀県立琵琶湖博物館の収蔵庫は動物(362), 植物(589), 地学(577), 環境(103), 民俗1(534), 民俗2(599), 考古(228), 特別(303), 液浸(456), 冷凍(31), 低温(21), 映像(188)となっています(数字は床面積, 単位はすべて㎡)。

○原稿募集

たより秋号は11月発行予定ですので、原稿締め切りは10月末日とします。また、会誌の原稿も募集していますので、ふるってご投稿ください。

編集後記

この夏は、やたら早くに梅雨明け宣言をしたと思ったら、案の定、しばらくしたら戻り梅雨のような空模様が続きました。天候も人の思うようにはなりません、新博物館への期待もままなりません。資料の寄贈は早い者勝ちの様相を呈していますが、私の順番はかなり後ろの方です。ネズミ等の液浸標本(新博物館の液浸収蔵庫は異常にせまい)や本などは死ぬまでに整理しておくこと、と連れ合いに厳命されていますので、いよいよ真剣に考えねばと痛感しました(善)。

自然誌だより89号

発行日 2011年8月20日  
 事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17  
 清水善吉方 三重自然誌の会  
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会  
 郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会  
 年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)  
 e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp